

029
465
1

卷之三



029
465
1



11802
248
11
11



浦射山集序

人所見之物必有其所以然者
此所謂之理也
雨者何物之氣也風也雲也日也
雷者何物之氣也風也雲也白雲
者何物之氣也風也雲也日也月也
水者何物之氣也風也雲也日也月也

名あればんわせ初時雨 罗城
荷舟とひ揚のてゆめの 桂立
轟駄おもむきとこゝ極哉 素外
所用あつたてゆめ御事、驥六
御もせるま夜極意の御み色 方明
船もみづらをくわづけ 岳軒
橋りくらのきぬわゆふ 伏首

けんくきりつめのゆき
あてつゝやうやうとすれどく
そくするのふともかみ、因幡底
素波羅船をいはるに良き、海お
いへりとれひゆくを思ひおゆば
れのまことに、おこうまの思
あつれ物一乗時す、あひき

卷之三

老ちるのひからゆるゝが
寛ひたる年少が有れ把高風良
用ひる事へて為徳厚の士鄉生る

湯射山集

湯射

櫻屋野

山吹色を呈乃つ多て此花の色
男さかり我ニシテハナ
シテキ清流ふむん細羽
毛力あらヒアセサムシカレ
特て薔薇を惜シ莫ナツモ
アキタケルを除る月暮
トシナカニ急くもなまくも行
うはむく鳥音ひづりをもれ

隠ヘモシテシル四絃代也
桺カ桺シ添ヒ尋る
炬曲巻火不以ノシテの海ナリ
晦日ノシテ年賀ヒモサ
桺葉を曳シテ載る油の上
浮ヘテすとああて音シ
奥底をもくとむと並ヘ置
位をすむるふるみる

故鳳葉故鳳葉故鳳葉故

故葉、故葉故葉

乞乞方小篠のあらわと運はする
なむけとゆる人り四五人
いすへの香とそ侍の古簾
あかね障子を立ててさかる
禪室のすう小簾のちく保と
不く可 アサモリ 人とより
おもろに枝小袖する月のす
りあけておの新の一枝

篠故篠故篠故篠故篠故

か秋のまぬ草種一又なり
豆の麻る君の日また之紫
る市の唯つやくと
寺のまな草と活ひ東ぬむ
浦山も、花の序垂の笠やしと
書むる流れみのかあるふ

篠故篠故篠故

夜の嫁

道引葉小小浪立り秋晴不二
而く年ぬれ以海の月
玄酒や四ツ時譲も浮遊
國姿不遙ふこゝる
す鳩の音よ折く鶴をぢや
田乃川端のうなづき根の木

高根
人

根

呂利

板底^{シテ}の音ありて江也^{ハリ}
花小^{ハナ}さ^ハる物あるも
をうふ^{ウフ}と音を喰てゐる^{ホーハ}7歳
霜^{シキ}うちら^{シラ}唐^{カニ}湯神^{ヒノミツ}ふ^フ利^リ御^{ミツ}
躬^{コトハ}を^ハら^ハこ^ハり^ハす^ハる^ハき
思^{シム}便^{イシメ}の^{シム}く^ハて^ハく^ハり^ハき
おと^シひの月^{ツキ}秋^ハ立^タき^ハる^ハ楓^{カシマ}
づ^ハみ^ハま^ハに^ハ躍^ハ舞^ハ集^ハ散^ハ

うはせ見^{ハシメ}子^{ハチ}の白^{ハタケ}あ^ハて
日^ハ出^{ハシメ}見^{ハシメ}す^{ハシメ}と^{ハシメ}云^{ハシメ}て^{ハシメ}し^{ハシメ}る
挿^{ハシメ}か^{ハシメ}柳^{ハシメ}か^{ハシメ}つ^{ハシメ}と^{ハシメ}花^{ハシメ}の頃^{ハシメ}
古^{ハシメ}の^{ハシメ}根^{ハシメ}源^{ハシメ}く^{ハシメ}葉^{ハシメ}の火^{ハシメ}を^{ハシメ}焚^{ハシメ}
跡^{ハシメ}もの^{ハシメ}と^{ハシメ}ゆ^{ハシメ}少^{ハシメ}ふ^{ハシメ}生^{ハシメ}も^{ハシメ}身^{ハシメ}と^{ハシメ}鳥^{ハシメ}
弱^{ハシメ}き^{ハシメ}ち^{ハシメ}と^{ハシメ}シ^{ハシメ}れ^{ハシメ}よ^{ハシメ}す^{ハシメ}る^{ハシメ}我^{ハシメ}
文^{ハシメ}意^{ハシメ}ハ^{ハシメ}と^{ハシメ}之^{ハシメ}ア^{ハシメ}ゆ^{ハシメ}か^{ハシメ}う^{ハシメ}
風^{ハシメ}華^{ハシメ}り^{ハシメ}く^{ハシメ}と^{ハシメ}絶^{ハシメ}小^{ハシメ}墨^{ハシメ}う^{ハシメ}ば^{ハシメ}と

利人蕉人利人蕉人利人蕉人利人蕉人利人蕉人

行となりて平小弓の宋呼を
みゆて来るものつむりと
さゆく所は小町の御糸錦
余ふとも見るすすりはる
跡 そよ子と掛れる手乃市
筋 まきふ見るを空乃月
夕 あらわとほく夜ニところ
をの詠 うおのまめづりて

繁人利繁人利繁人利繁人

あの川毛羽織着である繁名
老うこうらひ以のもかづん
犬の子の流れあるがとほくち
家の庵を廻やほこままで
幾の筋も細き、傍を堵かへ
訴えもなき、智恵を競ふる

利繁人繁人利繁人利繁人

秋聲草

一姫きのうち小毛をひよかの風
穢らうよ兒 家乃 小庭
擣乃のりまでもるき刀のけ
地乃保とくよ面を障也む
色の嘗て方へ階子を起はざり
何所りやうやうめ黄昏
素襪

芸門

呂利

雌迫

春也

宇上

面白記日うみを貰ふる石之
桂乃鉢をあふ流なまて
二の三の捨ひあけ事す蟹の甲
すらく少老乃様に見
て見了流事ひ路の襖あり
師走多より傍事ゆれ
室月よまくくともおまめ
かなることこの江戸ちう紀里

写つて移う一花申くすと鳥
子供の袖下なびくとれゆ
花秋嘆縮着孔肩の充りこ
錦巻へたくわあらぐの添
ちとむらまきの字あくと見て居り
聞する聲とる都知事の宣
今もすとれどそらくれ廣島
ゑとみかゝづく紫陽花さり

あのふと後の申うのうへは
ちのひてはる藍染のぬ
さきのよか鷺鷺帽子よ羽日暮
どうくゑるみうみ院
万代の松の匂ひもこすりて
をあひに葉垂る鶴のくわがり
陽風ふねるそろのメ月夜
常不えゆる七夕院

横小える牛をつらまて鶴若
姫ゝまくやゝ拿どさひ
危角にて持扇のおこる伏見脇
のふうとみ取人のゆう
心あてふぢのや鹿の花や花の雲
戸小倉す黒一色のぬかの

近門 磯、利近

近利門 磯近

口子庵

障
歩
面を
掃るの刃
チ秋
ふ鞋
乃ち
やくゆ
花
早
稻の
書
おひら
字を
見
て
人
手
り
も
る
四五
年
の
体
板
戸
買ふ
稻
室
ある
年の
書
か
へ
る
千
名
の
ぢ
ろく
と
れ
素
礎
芸
門
若
人
雅
近
呂
利
子
桐

保のめある畠山の山岩年山芸門

女仰り御持手に括る斗入

まきみ高き言ふあゝ斗入 雅近

お不うちと見み深の葉子 着人

扇ひきまの枝をなき 斗入

あらぬわて西行よやか 吕利

月乃夜の銀月わざん人ハ 海 烹葉

ほとのめうへ海ふ所烹芸門

風客

ぬす記賀と並る松ゆ少 岩人
 雀のみのれ御の板のゆ 雅延
 花咲てほの糸る葉ひくよ 吕利
 音のゆくよももの風ゆ 斗入
 お家さる席風をあられかく 吾門
 未良み朝日の高むて照 烹葉
 手をかくす山巣ととよみとま 吕利
 おれ若葉平門をあらわ

ある事する事ありけりやうの能
じゆのが已前まで当ひぬる
膳食不なる所食事と積まつて
さへ也、不物思ひて居る
白湯の香とかくふ吾つかち
造あるあるる所我亨膳さ
三日月の先あ即き事ともち
舞ゝて大不 嘴る、

若人 斗入
素葉 斗入
雅延 若人
素葉 斗入
雅延 若人

生タマネの色もかわ魚鰯の切せ 芸門
あらひに而へ扇の川のよ 烹葉
とふの小油されよし思考一々 吕利
繭の折枝は乃ちのうえり 雅延
枯枝乃葉の廣き花の唐 斗入
新稿毛陰乃雲より入る 吕利

蕉門俳諧書林

京三条通寺町西江入ル

菊舎太兵衛

